とある高校生達の提督業

D表

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東京にある某高校生達が春の遠足で横須賀へ行くことになり主人公の神原　聖月（男）はとても喜んでいた。

彼は艦隊これくしょんから軍艦や艦載機などに興味を持ちプラモを作ったりしている極々普通の男子高校生。

そんな彼と彼の友達による提督業を纏めたお話。

ちなみに彼等は１６歳。つまり高校２年生です、聖月君が艦これを始めたのは高１の初めです

目　次

プロローグ　不思議な夢の世界 ―― 1
第1話　～邂逅～ ―――――― 10

プロローグ　不思議な夢の世界

「なぁ聖月、横須賀って何があるんだ？お前なら知ってるんだろ？」
そう俺に話しかけてきたのは親友とも言える小鳥遊　京介（たかなし　きょうすけ）。ちなみに言うと俺の幼なじみでもある。
こいつは俺と同じタイミングで艦これを始めた。
にもかかわらず２―４でまだ止まっている。
全く何をしているのだろうか…
「そうだな…かの有名な戦艦三笠が置いてあるな。あとはアニ○イトとかがあるそうだぞ？」
こうも聞いたことをそのまま言ってるように聞こえるのは横須賀へ行ったことがないのだ。
それどころか呉、舞鶴、佐世保さえも行ったことがない。
だからこそ今回の遠足は嬉しい、みんなの前で飛び跳ねるぐらい嬉しかった。
「そうだな、あの時ほかの人達の視線は『気持ち悪いな』って感じだったものな」
「京介、君は言っていいことと悪いことが分かってないのか？」

「わざと言ってるに決まっているだろう?」
「あぁ、そうだろうな。だからこそ腹が立つ!」
「ほーら!2人ともそろそろ授業始まるよ!」と綺麗なソプラノの声が響く。
そう言って俺達の所へズカズカと入り込んで来たのは京介と俺の幼なじみ、そしてこのクラスの委員長である細雪　耀（さめゆき　ひかり）。
そして加えて言うなら京介と耀は付き合っている。いや、ぶっちゃけ言うと京介は俺と遊ぶより耀と遊ぶべきだと思うのだがその事を言うと
「女と下ネタ全開で話せるか?」
との事だ、その事については同意するが下ネタ好きなことも含めて耀は京介と付き合っているのではないか?と常々思う。いやそう出ないと俺が困る。
耀の事が好きなのかと言われると、友達として好きとしか言えない。
というより3次元の女のどこがいいのだろう。
は、話が逸れたな。
簡単に言おう、京介と耀が別れたらどんな風に声をかければいいのかが分からないんだ。
放っておけという人もいるだろうが生憎俺は友達思いだからそうことはできないのだ。

まぁ、そういうことだ。

時が過ぎ去るのは実に早い。

気が付けば7時限目の終わりを知らせるチャイムが教室いっぱいに鳴り響く。

「細雪いー、プリント運の手伝ってくれー」

と7時限目の担当であった先生に言われ委員長である耀は重そうなプリントを抱え歩いていく、京介は助け舟を出さないようだ。俺も出さないが。

さて、明日は待ちに待った横須賀へ遠足する日だ。

今から気分が高揚する。

等と考えてるとそこへ耀と担任の先生がやって来た。

「ＳＨＲ始めるぞぉ」

「起立、気を付け、礼」

「「「お願いします」」」

耀の号令と共にＳＨＲは始まった。実を言うと俺はこの時間が嫌いだ。

スマホを使っててはは取り上げられる、そしてなりより暇なのだ。

眠くて欠伸が出そうだ。そんなことをすれば先生の逆鱗に触れ長い長いお説教が待っているはずだ。

何としてでもそれは回避しないといけない。
そう…耐えなけれ…ばｚｚｚ
「ぞ?……りだぞ。起きろ聖月!帰りだ!」
な、なんだ!?
「なんだ京介か脅かすな。」
「おら、帰るぞ。明日は早起きして横須賀に行くんだろ?」
そうだった…
「んじゃあ、帰るか」
ググッーと1つ大きな伸びをして筋肉を柔らかくほぐす。
帰り道は特に何もなく面白みもなかった。
「ただいま」
家に着いた俺は誰もいない家にポツリと挨拶をした。
一人暮らしを俺はしている。
なぁに、困ったことは一つもない。
料理、洗濯、掃除その他諸々全て1人で出来る。
強いて上げるとすればたまに寂しくなるぐらいか?
その時は艦これをやって気を紛らすだろう。

やはり1人というのはなかなかどうしてか寂しいものだ。
「さぁ待っていろ、俺の艦娘達よ。」
一人だから聞かれてないという安心間に駆られ独り言が多くなる。
実際に聞かれてないけれど。
そうやって1日が過ぎ去って行く。
ピピピ、ピピピというけたましい目覚ましに起こされ俺の1日は始まる。
「さて、忘れ物なし…鍵は閉めた…カメラもある…よし！行くか！」
現在６：５０これならば９：００までに余裕を持って横須賀に行けるだろう。
あぁ！楽しみだなぁ！三笠に早く乗りたいなぁ！
そんな気持ちでいっぱいだった。
現在８：２０
横須賀駅に到着。
やはり学校の人たちは誰もいない、こんなに早く来る人は俺みたいな軍艦スキーか意識高い系リア充のどちらかだろう。
「助け…て…お願い…」
!?
か細い声、そして高い声聞こえた気がした。

誰の声だ？周りには朝のランニングをしているおじさんや散歩をしている高齢者だけだ。
あの声を出せるとは思えない。
「…気の所為か」
時計を見ると８：４５を指していた。
これは不味い、集合場所に早く行かねば。
あろう事か俺は三笠公園を散策していた。
まぁ、集合場所は近くなんだが。
集合場所へ行くと京介と耀が来ていた
「おっす、こんなに遅くてどうしたんだ？」
「いや、公園を散歩してた」
「ジジババの趣味かよ…」
そんなんじゃない、気が向いただけだ。
「聖月君、おはよ」
「ん、耀もおはよう」
「全員集まれー！」
先生の大きな声が響いた

その声に従うように散り散りに集まっていた学校のヤツらが列を手早く作っていく。
「えー、欠席者が居ないかクラス委員長は確認するよう。欠席者がいた場合直ちに担任へ報告せよ。」
「助けて…!」
先生の話の最中にそんな声が聞こえた。
その声は他の人達も聞こえたようで不思議に思っている。
だが、ここで1つ疑問が浮かぶ。
『なぜ、俺達のクラスだけが聞こえた素振りをしている?』
そう、他のクラスは何事も無かったかのように話を聞いている。
何故だ?何が起きているんだ?
そう考えていた時にいきなり地面に穴が空いた。
丁度俺達を飲み込むぐらいの穴が、教師達が何か騒いでいる。
(俺達はここで死ぬのかもな…)
否が応でもそう考えてしまう。
「あなた達は死にません…!」
さっきと同じ声だ。
「あなた達には艦隊を運用して頂きます。

艦隊これくしょん…というゲームをご存知の方は分かりやすいでしょう。」
艦これ…だと!?
しかも艦隊運用!?なんだそれは俺達に提督に成れと言ってるようなものじゃないか。
こう思った直後地面が見えた。
さぁ、状況を整理しよう。
俺達は落ちている
下にはコンクリートであろう地面
この二つから考えられるのは
「あっ、死ぬ」
「ひっきゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」
「死にたくねぇぇぇぇぇ!」
「ママァァァァァァァァァァァァァ!」
というクラスメイトの絶叫
一人骨川○ネ夫が混じっていた気がするが放っておこう。
だが、死ぬというのは杞憂であった。
地面に近づくにつれ落下速度は段々とゆっくりになっていく。
「皆様、手荒い歓迎をしてしまったことを深く謝罪致します。」

艦これプレイヤーなら1度は見たことがあるエラ子がそこにはいた。
ザワザワ
みんなが騒ぎ出す
「一ついいかな?」
耀が1歩前に出て質問をした
「ここはどこだかはこの際置いとくとして私達はどうなるのかな?」
「ご安心ください、地上の時間は止まっております。先程も告げましたが皆様には艦隊を運用して頂きます。質問は以上ですね?では失礼致します。」
そう残してエラ子は消失した。
これから話すのは俺達の提督業についての話だ。
時に泣き、時に笑い、時に怒り、時に喜んだりする。高校生達の話
何?俺も高校生だって痛いとこを言うなぁ。
まぁ、いいだろう?それぐらいは。
～不思議な夢の話ｆｉｎ～

第1話　～邂逅～

「なに…それ…」
　ポツリと耀が漏らした。
　それを皮切りにクラスメイト達は風船が破裂したように一斉に騒ぎ出した。
「アイエエエエエエエエ!?ナンデ!?ナンデカンタイウンヨウ!?」
「いやだよぉ…帰りたいよぉ」
「実際の艦隊運用か…面白そうだな…でも轟沈させたらゲームより絶望感が強いんだろうな」
　などなどと
　喚くやつも居れば家のことを考え泣き言を漏らす人、艦これをやってる人達は楽しみだのようなことを言っている。
　俺も多少は楽しんでいる。
「なぁ京介、お前はどう考えてる?」
「どうもこうも…辛そうとしか言えないな…」
　そうだろうな…まぁ、やってみるしかないという事だろう。

「耀、大丈夫か？」
京介が耀の元に駆け寄り心配した様子で声をかける。
「京介…私達どうなるのかな…帰れないのかな…」
「…」
耀の質問に京介は答えられない。
俺も答えられない、明確な答えがない以上気休めの答えは言えないという事なのだろう。
「君達は好きな鎮守府へ行ってもらいます。」
と先程消えたエラ子の声？音声が聞こえた。
その声が聞こえた途端ざわついていた声が静まった。ここまで統率が取れてると逆に恐怖を覚える。
「行きたい鎮守府の要望があれば言ってもらいたいのです。
あぁ、もちろん初期設定からスタートです。要望が無ければ勝手に飛ばさせてもらいます。基本2人1組ですが1人になる人も居ると考えてください。では」
なら、俺はゲームでも着任しているラバウルだな。
あわよくば1人がいいな、あと耀と京介が一緒の鎮守府だといいなぁ。
と思っていると俺の体が眩い光に包まれ視界がブラックアウトした。そこで俺の意

識は途絶えた。

「ソロソロオキテクダサイ」

と耳元で言っている声を聞き少しずつ俺の記憶は微睡みから浮上してきた。

「オキタヨウデスネ。ササ、コノナカカラショキカンヲエランデクダサイ」

「一つ確認したい、君は妖精さんでいいのかな？」

「エエソウデス」

「その半角の喋りを辞めてくれないか、聞き取りづらい」

「むっ…仕方ないですね。で、誰にするんですか？」

そうだな、ここで選ぶべきはやはり叢雲か吹雪だろう。

まぁ、改二改装するのに７０レベル必要ということで中盤からが強いんだよな…

序盤だと四連装（酸素）魚雷を持ってくる五月雨…任務消化ならば電…

一長一短で甲乙付け難いな…

ゲーム始めたばっかりだったら電をすぐ選んでいただろうな。

だが、これはゲームではないということを忘れてはいけない。

尻をビシバシ叩いてくれる叢雲が一番適任ではないか？

うむ、叢雲だ。

「決めたぞ、叢雲で頼む」
「了解しました。大本営に連絡を送りました。
来るのは3日後と思われます。それまでは施設を確認したりほかの人達に連絡を取ったりしてください。
こちらをどうぞ」
そう言って妖精さんが手渡してきたのはタブレットだ、見てみるとリアルタイムで更新されているようだ。
耀と京介の名前を探してみると…2人とも横鎮に着任したようだ。加えて言うならペアどうしでもあった。
耀も京介が居れば大体の事は出来るだろう…。
京介はゲームでやっていたから問題は無いはずだ。
懸念事項は払拭されたので妖精さんが言っていたとおりにラバ鎮をブラブラ散歩してみる。
提督室は何処だろうと思いつつ歩いていると提督室は思った以上に近くにあった。
その扉は普通の部屋にある扉に比べとても高価であろうということが見て取れた。
黒檀でも使っているのだろうか?まぁいい
「すぅーはぁー」

と深呼吸一つ
そして
ガチャ、ギィ
と見た目通りの重圧感溢れる音と共に扉を開ける。
そこに配備されていたのは
パソコンだった。
思わず「は？」という声が漏れたがこれは致し方ないというものだ。
書類とかが束になって居るのかと思ってみればパソコンがあったのだ。
これは流石に声が漏れても仕方ない。
予想外にも程がある。
起動してみるとＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔ、Ｅｘｃｅｌ、Ｗｏｒｄと必要なものは全て揃ってる。
そしてＬＩＮＥも入っていたり等々至れり尽くせりだな。
次は工廠、入渠施設に行こうと思ったのだがもしかしてと思いパソコンで見てみると案の定設備が見れた。
流石に入渠風景は見れないが…
そりゃそうだ。

いや、残念では無いぞ？残念では…
1通り目を通したので何もやることが無く。
そのまま今日は眠りに着くことにした。
あぁ、早く叢雲が来ないものか…
～ｆｉｎ～